

地域に根ざした生活関連の諸問題について雑感

はじめに

07.10.

最近、「これについてどう思いますか、あれについては」など、問い合わせられることが多くなってきた。よろず何でも考えることが好きなものだから、専門外だろうが何だろうが、大いに語りまくっている。落語家のようにお客様から題をいただいて小話を即興で作るほどではないにしても、こうした語り合いは、私にとってとても楽しく、いまでは小話家のような気分になることもしばしばである。もともとは「建築は人づくり」という観点を持っていたものだから、どこへでも出かけては、人づくりの観点で語り合いを楽しんでいる。そして今、皆様方とも語りあいたくなり、ここに筆をとることにした。

実際に問い合わせいただいた問題は次の通りである。

●自然と文化系；1~4章

- 「自然環境保護と育成」、「文化としての祭り」
- 「雪の文化の意義」、「文化財保護と文化育成」
- 「文化と市民」

●生活系；5~7章

- 「子育て支援」、「男女共同参画」、
- 「少子化と子育て」「消費者教育」

●教育系；8~9章

- 「地元大学に望む」、「これから美術館」

●社会系；10~11章 「景観について」、「公共事業について」

●体育系；12章 「市民スポーツについて」

これらの14個の問題は、すべてわれらの生活の営みを多面的にどう育んでいくかという問題そのものであり、いってみれば生活と文化的範疇そのものである。上に記した問題ごとに、私なりに(ささやかながら)出来る範囲のアプローチで迫ってみたく、ここに語ることにした。お付き合いいただければ幸いに存じます。

1. 自然環境の育成について 06.5

富山では、環境問題を観光資源の保護として保護柵や觀光歩道の設置といった技術的議論が多々ある。こうした論議は当然としても、いまひとつ大事な視点が必要である。それは、「住まい環境からの視点」である。ここに主張したい。

自然環境育成の問題については、「住まいとその延長としての環境」の問題として捉えることにして、生活環境と自然環境の両面からエッセイ風に論述する。

富山県外の読者の方へ一言補足する。本文に登場する山について、立山は富山のシンボルであり、精神的な支柱にもなって

いることを念頭において読んでください。

<1>. 第一に、自然環境について。

「富山は自然が豊富ですね、立山があるからですね」とよく人から言われることが多いが、実は、これは「立山のみが自然であり、他のものには関心がない」といった風潮そのものともとれる。なぜそのようにとのるのであろうか。基本的な視点が欠けているといいたい。

山に限定して少し語ってみよう。私個人としては、山のすばらしさを常に皆さんに熱っぽく伝えている。ある時は(心無いハイカーがいれば注意もする(そんなことはほとんどないが))、訪れた多くの方と山のすばらしさについて語り合ったこともある。

またある時は、自然保護シンパのある団体からエクスカーションで美女平(立山登山のときケーブル終点駅付近)のブナ林立ち枯れを見学したいのでと案内を頼まれたが、私はそんなことより大辻山(立山の前座の山)に登って立山の雄大さを鑑賞したほうが良いと助言してガイド役をも買って出たこともあった。

さらに東京からきた友人にも、富山の自然を堪能していただくのも結構だが、自分らの身近にもすばらしいものがたくさんあるはずだから、それらを見出し育むことこそ、自然環境保全のベースであることをご理解いただいたこともあった。

こうして、山に登っては山のすばらしさを実体験で重ねていくと、自然保護の切実さが理解され、またどんな形にせよ自然保護の行動が身についてくるから不思議である。

<2> 第二に生活環境について。

富山では(これまで)持ち家率ナンバーワンといったことが、逆に家庭や地域社会が健全であるかのような錯覚におちいらせることがよくある。もちろん、現代文明社会において、効率優先の生活環境が富山のみを特別扱いするはずもなく、場合によっては家庭崩壊や地域コミュニティ崩壊が静かに進行しているようにも思える。富山では、敷地に十分余裕があるにもかかわらず、(子供の精神に障害を与えることが懸念されている)高層住宅そのものがほとんど無いにもかかわらず、住環境は都会に比して圧倒的に良好なのにもかかわらず、そんなことを思う。

これを何とみるのか。恵まれた自然環境や居住環境だからこそ、環境を案外大事にしない風潮が自然と身についたかのようでもある。居住環境は空気のようなものであり、環境の良さを堪能するといういわゆる住まう文化が実は育っていないかったともいえる。この機会にそうした文化を育みたいものである。

<3> 以上、まとめとして。

今我らには、自然環境をも含め我らの生活環境に「自然に関する営み」が身についているかどうかが問われている。ここで

いう（私がいう）「自然に関する営み」とは、生活の中で良いものを良いといつて実感していく体験そのものであり、これには、すばらしさという感覚を研ぎ澄まし、すばらしい感動を十分蓄積していくことが必要となっている。

よって、結論として、自然環境育成についてはまずは十分な自然鑑賞すばらしいという感動を積み重ねていくべしといいたい。

ただし、上記のことは我ら生活者側の話であり、自然保護推進や環境構築の専門家側に対しては別途注文がある。それは、専門家が市民の声をもっと聞き、本質をしっかりと把握することである。

付録；観光について 08.11.14 追記

立山・黒部アルペンルートに訪れる年間100万人もの観光客が、都会に居住するかのような雰囲気での観光を楽しんでいる。まだ雪深いGWのときさえも、一の越（立山中腹で黒部ダムが見える）までハイヒールや革靴で上られる方が少なからずいる。 詳細議論は避けるが、そんな感覚が、形を変えていろいろなところで自然を破壊していることはいうまでもない。自然のすばらしさの満喫は堪能する方の心構えも必要としており、観光の方々には、生活環境を都会のものだけという狭い考えを捨て、もっと奥深くものにして欲しいものである。

2. 雪の文化と誇りについて 06.7

冬場の生活環境の維持として、雪をどう克服していくのかが論議されている。そこでは、効果的な除雪をどう計画するかといったことが主となっている。こうした議論を聞けば聞くほど、今ひとつ視点として雪を無機物として扱うのではなく、有機的なものとして、文化的な面から総合的に検討することを訴えたくなつた。

「富山の特徴は何ですか」とよく人から聞かれるが、そのとき決まって「山、森、水、雪、米」と答える。このうち雪については、都会人にとってはレジャーにかかせないものという捉え方であろうが、我ら富山県民にとっては「雪はうつとうしい」ものの他府県の人には「誇らしく」いうことが多いのは、私だけではないはずである。

とはいっても、いざ多雪になると、除雪やら屋根雪降ろし他で困ることが多く、特に最近、農村部の高齢化がすすむにつれ、災害弱者として根本的な社会問題を呈した由々しき問題もある。これについては、除雪対策の検討という枠を超えて高齢者問題を如何に解決するかということが問題の核心となる。関係の方々を含めて広く議論して財政的な政策が必要かと考える。（災害弱者への援助ボランティアもなかなか機能しにくい状況にある。）

また、そうした問題とは別に市域における我らの生活環境には、除雪はあって当たり前の感があり、こうした感覚が汗水たらしての作業を敬遠しがちの傾向を形作っているように思える。このためか、親雪の意識がなかなか育たない。

私は、我らの生活や生活文化には雪がもたらしたものは大きく、これが富山の県民性となって結晶化していると思っているので、この点を踏まえて雪について自然の情景の他に精神構造の形成として、例えば粘り強さは雪が与えてくれた試練の結果ともいいたいし、またもっと積極的に雪にかかわって生活していきたいものである。

それにもうひとつ、たたみかけたい。今の世の中、雪の文化や糸瓜（へちま）もなく、機械力に頼って何でも片付けてしまおうという風潮が強くなってきた。こうした状況であればあるほど、雪をもっと身近なもので親しみ、苦労を分かち合い、誇りを持つとともに助け合いの精神を育むことこそ、機械力中心の方策と対極する方策のように思えてくる。と同時に、克雪や親雪の発展として、建築や街づくりの観点からの検討も急務であり、雪を見ながら生活を楽しむとか、雪景色を十分堪能するとか、そんな楽しみ方の良さをもっと身に付けていけるよう日常生活の面でゆとりを持ちたいものである。

結びとして、普段のゆとりこそが、雪に対して文化育成と誇りの醸成につながっていくものと主張したい。

3. 祭りの普及・啓発について 06.7

いま、どこの地域でも昔から続いている祭りの存続が難しくなってきてている。祭りを文化財として捉えまもついくにはどうしたらいいのか、熱い議論が続いている。私は、祭りうんぬんの前に文化育成を日常生活のなかで文化に親しむべしと考え、ここに主張する。

文化の重要性は十分理解されているものの、日頃より営みの中で文化を認識することは極めてまれである。（文化は空気のようなものといったところか。）にもかかわらず、生活にゆとりやら潤いやら心の豊さを求めていく際に、どうしても文化というものにすがりがちである。それゆえ、文化には即物的な要素が強くなり、かつ商業主義という現代風にアレンジさせられがちとなってしまいがちである。特に祭りとなると、その傾向が顕著に現れ、祭りの担い手の気質が変わり、祭りの内容も本質は失われて形のみが残るといった懸念すらある。ではこうしたことをどう考えればいいのであろうか。

もともと、祭りが地域コミュニティに立脚したものであるので、祭りの衰退そのものは、コミュニティの衰退あるいは文化の先細りそのものといえる。そうした祭りを継続（存続）させるには、以下に示すように、根源的なものと表層的なものとの二面に分けられる。

第一に祭りの今日的な変質をともなっても残すもの。

第二に地域の問題として根源的に解決していくもの。

どちらが良くてどちらが良くないというつもりは無く、地域の状況諸事情に併せて、やれるところからやるといった方策がとられることでいいと考える。文化を如何に継承発展させていくのかが問われれば、それだけのボリュームを持つ価値観論争

をやればいいし、また、祭りを形だけでも残すことを選択するとなれば、それは文化の今日的環境の中での変質という捉え方で十分もある。となると、何でも有りということになってしまふと思われるかもしれないが、そうではなく、どんな選択でも文化育成につながるからいいといいたいのである。(そうした観点での論及があまりにも不十分だから、まずそこから始めたいという気持ちである。)

私は、問題設定を祭りの存続そのものの次元ではなく、(どんな様相になるにせよ)「文化育成の基礎は如何に」といった次元にしておけば十分と考える。このように考えれば、初等・中等教育に文化教育を倫理や道徳教育とともにリンクさせて、家庭で大人が子供に文化を大切にする日々の行動を地味に重ねていけば、いつしか文化の育成につながっていくことであろう。たとえ歴史性がなくても、たとえ文化性がなくても、何の変哲もない例えば食事であっても、身近なものに文化の香りを感じ生活を営み、そんな行為の連続が文化を形づくっていくことであろう。

そしてもうひとつ、多くの方を結集して文化談義に花を咲かせるだけでもいいと考える。文化施設や文化教室といったものばかりではなく、地域の井戸端にそうした雰囲気の花を皆さんで知恵を出しながら咲かせたいものであり、津々浦々からの雰囲気造りを一人一人が心がけていきたいものである。

4. 文化財保護と文化育成 06.3.09, 7

◇4. 1 06.3

文化財保護も含めて文化育成について、単に古いものを残すといった視点だけが特に目立つが、技術偏重ぎみの世の中だからこそ文化育成の視点が重要であるとして、生活に文化をもつと取り込むことを主張したくなつた。

最近、ものについて「もったいない」という言葉が定着しつつある。しかしながら、依然として大量消費のムードが減速せず、リサイクル、リユース、リデュースといつても「もの」そのものの寿命があいもかわらず短く、こうしたことが文化の育成に大きな阻害要因にもなりかねないのではないかと危惧している。文化育成はその意味で高度文明社会の対極にあるともいえるので、文化の育成と保護という根源的な問題は、高度文明社会になればなるほど時代的な解決を必要としている。これには種々の立場の方々が事あるごとに種々の意見を発して対応していくべきであると考えている。こうした観点で少し私事を記す。

私は建築についてここ数十年教鞭をとってきており、若い人に生活空間の設計を教えていたが、そこにおいて「人を愛し」「ものを大事に」といった姿勢が根幹であると力説している。しかしながら、若者にとっては文化についての感覚が多少疎く、例えは縄文式建築を見て何になるといったことを親とともに主張され方もおられ、その都度、文化の意味と育成について語り、

「我らは文化の育成の延長線上で今日的に生産活動を営んでいる」と強調している次第である。こう考えると、文化育成は市民や子供ともども携わるべしとして、様々なところで様々なときに文化育成を細々とではあるが声高にせずにはおられない。

文化育成については、これまでの文化財を如何に保護していくかという大事な問題に加えて如何に文化財に親しんでいいけるか(文化財を如何に生活に活用していくか)という問題がある。最近、街づくりや住まいづくりの市民参加活動が盛んになりはじめているだけに、市民や子供の文化愛好(文化理解)の感覚が育てるという視点で保護の具体的な方策が検討されていけばと願っている。

私は文化財保護の専門家ではないが、教育を通して文化財に寄せる心意気を若い方や市民に伝えていければ、あるいはその逆を伝えていければ十分と思っている。文化財保護に際してのいくつかの思いを以下に列挙する。

- (1) 我らの生活空間にどう文化を根付かせるか、特に若い人のために
→施設設備の話になる。
- (2) 文化財をどう教育現場に持ち込んで愛好家(いや理解者)を育てていくか。
→初等中等教育で文化財教育ということである。
- (3) 文化を親しむことができるようなことは何か。
→市民教育、あるいは啓発活動ということである。

私は、若い方に教育の視点を通して文化的な質を浸透させ、文化財を大事にしていくように働きかけたい。また逆に、若い方の心意気をぜひとも文化財保護に反映できるようになればいいと思っている。我らの生活空間はいよいよ富山県全体が文化の空間となり、文化の香りのなかで健全に社会生活を営みたいものである。

◇4. 2 09.07.17

文化(および文化財)がもっと市民の身近になるためには

文化について、専門的視点からではなく身近な市民生活の延長でフランクにかかわることが必要と考えて、教育の立場から具体的な提言をしてみなくなり、筆を執った。

文化に造詣深い方が率先して文化を創造し文化財を保全していく責務のあることはいうまでもないが、問題は文化を支えるあるいは文化の担い手である一般市民にとって、文化がことのほか縁遠い面が多々見られることである。昨今、文化立国、文化立県をとなえるならばなおさらのこと、市民に縁近いものとなるにはどうすべきかを、広く市民を巻き込んで考えていくことが肝要である。

今またなぜ文化が縁遠いといわれるようになったのか。いや文化財はしっかりと保全され、文化財を核にした観光は十分に成立しているではないか、といった意見があることは事実であるが、それでも日常において、我らの生活において文化財がどれほど寄与しているといえるのであろうか。(寄与して欲しいから逆説的問い合わせをしているのである。)では、我らの生活はどうか、ふりかえってみると、我らは効率優先や利便性および

欲望追求のいってみれば今日的大量生産大量消費文化のなかで嘗んでいる。こうした嘗みの中では、今いう文化のみが唯一であり、これを越えたものあるいはこれまでのものは単に商品の一部といった感がすることもある。文化に縁遠いとは、まさにそのような状況をいうものである。

では、どうするのか。まずは、我らの生活が本当に今のままでいいのか、そんな根源的なところから考えていけば、おのずと大量生産大量消費文化ではなく、次にあるべき文化が造られるとともに、過去の文化がよみがえってくるのではないだろうか。

大上段に構えたが、要は、日常性に文化をどのように育んでいくのか、ということにつきる。それには、教育の役割に期待したい。すなわち、自分らの住んでいるところに文化を感じられるようにすべきであり、また学校の初等中等教育において歴史教育などを含めて、生活感が漂うようなものであるようにすべきと思っている。たとえば、初等教育において一般教科(理科算数など)の場合でも、日常生活に立脚したストリーとすべきであり、加えて自分らの住んでいる街においても生活感が街中に漂えば、それはとりもなおさず文化なのであり、ひいては、地域の文化保全というべきか、あるいは健全な地域づくりともいいうべきか、そうした地域づくりの生活次元からの下支えそのものとなる。

そしてまた、我らの(文化に対する)姿勢を確たるものにしたい。先人たちから受け継いでいる姿勢は、今あるものがすべてだめで昔に帰れとか、今までとは別にまったく新しく何かを作ろうといった二者択一論的なものではない。現在は過去の延長であり、将来は現在の延長であることを考えれば、大量生産の文化を経たからこそ、るべき文化の姿が洗練されて造られるものがあるはずである。だからこそ、来るべき時代には、文化の人間的側面や、文化を担う精神性がもっと問われ、その意味では人間が一回りも二回りも精神活動の面で大きく進化しなければならないといつても過言ではなかろう。こうした展開を可能にするには、やはり全国津々浦々、人間らしい生活を、言い換えば健全な人間生活を営むことから始め、文化を創るといった感覚の定着が必要不可欠であると思っている。

こうした取り組みは、本当に多種多様な方々の集まりでもって推進され、おおきなうねりとしたいものである。

5. 子育て支援について

06.5

◇5. 1 06.5

子育てが安心してできるよう、津々浦々から議論がなされている。子育てを社会的な問題や経済的な問題として論議していくことは当然である。ここで私は、多少建築的な視点から家庭形成のための大変な行為が子育てであることを主張したく、筆をとることにした。

「子育て支援」について、家庭の働き手の問題や経済的な問題は別にして、もっと人間関係の中で考えてみることにして、私の三つの思いを記す。

- (1)、子と親の育子環境をどうするか。
- (2)、青少年の健全な育成を子育ての次元からどう積み上げるのか。
- (3)、子育てを終えた方や子育て真最中の大人自身が子育て支援の理解をどう深めていくのか。

これらの思いは何の事はない、子育て支援を子育ての枠を越えて「大人の問題として捉えてみては」という問題提起そのものである。もちろん、「大人の健全な精神が如何に子育てに必要か」といったことはこれまで指摘されてはいるが、子供の成長・発達過程との関連でアプローチしたものは少ない。

そこで私は、子供の感性を子供と親が一緒になって育むことが精神的満足を追及した子育て支援のひとつと考えた。そして、私は成長発達過程の根幹の一つとして「子供の感性を如何に育んでいくのか」を問題にして、これまで、子供の造形教室(2000, 2001)や母親のための造形教室(2003)を主宰し実践してきた。

しかしながら、こうした感性の育成にも親と子供の住まい環境の健全さが必要条件となっていることはいうまでもないが、(感性育成の)周辺環境の整備はお粗末極まりなく不十分なよう見える。確かにこうした意味で議論花盛りである「子供の居場所の問題」が問題を解決するかのように思われるが、居場所そのものがセンス育成環境そのものではないことに加えて、居場所という特定の空間が限定されるのは子供と大人の交流がそこなわれることにもつながる。それでも居場所というならば、家の中や地域の中で特別に居場所をつくるのではなく、家も街もすべてが居場所となるようにするべきである。こうした趣旨のアプローチがぜひとも欲しいものである。

私は、これまで市民・子供教育に関する学術的なある委員会に委員として参加し、子供環境の整備について研究するとともに、こども学会(子供環境を問題にする専門の学会)にも会員として参加して、保育士や子育て関係のNPOの方々と具体的な実践を討議してきた。その結果、やるべきことは、日々多忙の生活において感性をキーワードにして大人自身の子供時代の感性を呼び戻しながらの実践活動の展開であることを確信した。

p.s注: 造形教室は、富山県民カレッジの自遊塾というシステムのなかで実施したものであり、月2回の頻度で年6回、各回は2時間ほどで、メニューは、写真コラージュや軸木造形、和紙による照明器作成などである。

◇5. 2 人間性の醸成からはじめる子育て 09.07.17

子育ては大人の責任。まずは大人が人間性を保持すること。異性と出会い、子供を愛しみ、といった人間本来の行動がないがしろにされそうな現代技術文明社会だからこそ、こうした問題に対し声を大にしたくなつた。

働く女性が子育てしやすいように、社会全体がどう取り組むかは大事な問題である。これについては他の専門のお方に任せ、私は、我らの生活の営みをもっと健全にすべしとして当該

問題をアプローチしたい。

少子化問題を見ると、結婚して出産する方は概ね二人程度と安定しているにもかかわらず、一方では結婚しない男女の比率が極めて高い。これを何と見るか。結婚よりも自由が追求されるべきという声が聞こえてくるが、そうではない。今日的の社会のありようが問われているといいたい。理由は二つ。一つには、結婚して良い家庭をつくり子供を育むといった本来の人間性を奪っているではないのだろうか。二つには、今の世の中、そこそこ働ければ生活でき、人と交わらなくても生活できるといった風潮が人間の絆という大事なものをも失わせているのではないかだろうか。つきつめれば、今日的な人間性の問題である。

確かに、昔は家庭を持って協力しないと食っていけないという(物質的に満たされていない)状況であった。それが今、社会が豊かになった。しかし、その豊かさが物質的面にのみ特化されてもはやされ、最も大事な人間性の本質について少しも議論してこなかったといつても過言ではない。今の時代だからこそ、人間性は、絆は、人間の信頼は、などなど、本当に求められる新しいパラダイムが必要となっている。

私はこうした観点で、一番の問題を子育てに絞り、大人が子育てを通して人間性を育んでいくといったことを世の中がもっともっと実感するとともに、こうした実践が社会に定着して大きな世論を喚起すると思っている。

では具体的にどうする?といわれたら、各自、人間性をホットにするしかないと言いたい。以下の二点について、取り組みたいと思っている。

1. 交流は交じり合うこと、語り合あうこと。

異業種交流だの異年齢交流だのいわれているが、(情報交換や親睦ということではなく、もっと身近に交流という意味で)そんなにしゃちこばらなくとも、ごく普通に職場で、地域で、それこそご近所さんどおして語り合えばいいのに、といつも思っている。そこではいきなりお互いの理解ではなく、(もっと身近に)語り合うことが一番であり、さすれば人間性の語りが生まれてこよう。

2. 生活観漂う教育。生活を楽しむ。

特に大事にしたいのは、初等中等教育において、もっと生活感が漂う教材やシチュエーションで人間性を前面に押し出した教育をしていただきたいものである。その意味で、皆さんで、もっと生活を楽しもうよ、といったことが津々浦々でにじみ出てくるように、各自心がけるとともに、関係するシステムもまた人間性をより押し出して欲しいものである。街や家の中に、そんな雰囲気が醸成されることこそ皆さんで知恵を絞りたいものである。

本アプローチは経済的政策と両輪の関係にあると思っている。今、この種の観点をすすめていきたいものである。愛、信頼、命など健全な生活から育んでいきたいものである。

6. 男女共同参画について

07.5

男女雇用均等をはじめ子育て等、男女共同参画について、議論が花盛りである。私は、これを男性側の問題、教育の問題として位置付け主張したくなつたので、筆をとることにした。

女性が社会にて差別待遇、賃金格差などの問題に加えて少子化問題など、将来を憂う問題が山積みである。これは何も女性の問題ではなく男性側の問題でもある。その意味で男女共同参画として、この種の問題にアプローチしたい。

男女参画について、就労における格差、賃金格差、待遇格差など、働く環境に大いに改善を求める実行に移し、そのための政策や指導が必要であるのはいうまでもない。

私はこうしたアプローチは他の方にお任せして、この種の問題を「要は社会の信頼関係を如何に築いていくのか」と捉えて、健全な人間性醸成のためのものとして子供次元も取り込んで長期的に検討すべしと思っている。もちろん、これは子育て問題そのものではなく、大人の世界だけに限定するのではなく、子供と大人を交えたアプローチしたいというものである。理由は、家庭における男女参画が子供に良い影響を与えるし、またそうした環境下で育つ子供は将来の男女参画をもっともっと充実して実践する手となっていくからである。こうした観点で、以下に具体的な問題について、「教育」と「家庭」をキーワードに論じたい。

(1). 男女参画で大事な側面となるものは、人づくり、家づくり、地域づくりである。家族が大事、地域が大事といわれているものの、ご近所コミュニティ、地域コミュニティなどにおいて男女参画がいまひとつである。よりよい人間関係を育むためにも、男女参画社会のベースとして、この種の検討をしたいものである。

(2). 子供が将来どんな視点を持てばいいのか。やはり、健全な大人の背中をみさせていきたい。親がもっともっと子供に関心をもつようにしたい。また子供の感性を育むように、男女で参画していくべきである。私はこれまで、ちびっ子を対象として造形教室を行ってきた。これは、一見、男女参画問題とは関係ないようにとられるが、実はそうではなく、子供の感性の育成には(男女の)大人とともにかかわっていくべきものである。

(3). 初等中等教育において、どう男女参画問題をより身近なものとして教えていくのか。その意味で、家庭の営みや社会の構成といったものの教育はこれまで以上にして欲しいものである。しかし現実には、受験優先のために、人間的な営みにか

かわる問題の扱いはまだまだ不十分といえる。そこで、教育に携わる私にとっても、初等中等教育のゴールには「健全な大人」の育成といった当たり前のことと想定して、これからも教育に当たっていきたいものである。

(4). 男女参画についてあまり立ち入りがたい問題は、どこまでが完全に男女平等であり、どこまでが差違であってもいいのかといったことである。特にこの問題は、人格尊重とあいまって家庭や教育での根源にもなりうると考えているので、検討は避けて通れないと思っている。

PS：余談：男女参画で女性のがんばりを期待する論調が多い。女性が職業人として働き家庭を守っているなど報道で取り上げられることがあるが、がんばらなくてはならないのは男性の方ではないかと思う。男性は制度的なことを隠れ蓑としているわけではないものの、女性にのみ努力をいうのは根本的解決にあらず、である。そんな視点で社会の世論形成をしていきたいものである。

7. 消費者教育について

07. 1.

消費者教育の一環として市民と専門家とのコミュニケーションを図る

消費者問題として、悪徳業者からどう身を守るか、賢い消費者になるには、といった観点で論議が花ざかりである。ここに、専門家をも巻き込んで論議すべしとして意見を述べることにする。

「消費者は賢くなるべし。」確かにその通りであるが、「生産者よ、消費者側の視点をしっかりと持つべし」ということの方が急務のように思える。この点があいまいだから、消費に関する種々の問題が本質を(あまり)論議することなく生産者側の不祥事とかいうことで片付けられている嫌いがあるのではないか。特に、この傾向は高度な技術をともなった場合には多いように見える。

例えば、耐震偽装事件のときにも(一部に)そうした捉え方があり、問題の論議の際に「消費者の意識向上をどうしていくか」というように、消費者にも大きな責任があるかのような論評も出る始末であった。(真に憂いておられる方も多いが。)もちろん、企業の社会的責任として企業コンプライアンスはようやく叫ばれるようになってきているが、そのようなことをいうまでもなく(消費者も含めて)市民側の視点があれば、妙な理屈付けまでは必要なしといいたい。加えれば、市民と(生産者をも含めた)専門家とのコミュニケーションが十分ではなかったことに問題があるといえる。

従って、この種の問題の解決には、当然、専門家をどう市民サイドに向けさせるかがポイントとなる。ここでは、以下に三点を方策として列挙することにする。

(1) 専門家にしつかりとした市民ベースの視点を持つてもらうようにする。(心有る専門家は多いので、働きかけひとつが重要と考える)

(2) 市民のニーズは単に欲しいものといったものだけで捉えるのではなく、真に信頼できる人が介在することが付帯条件であることを専門家側に理解していただく。

(3) 専門家がかくなる視点を持つよう働きかけが出来るよう市民サイドがポテンシャルアップする。そうした観点で世論を形成する。

以上のことを行なうには、第一に討議や働きかけの場を作っていくこと、第二に(専門家といつても多岐にわたるが)こうした観点に賛同する専門家をも(若干)取り込むを考えたい。これをもって、消費者問題が奥深く解決に向けて進むものと思っている。

8. 地元大学に望むこと

07. 1.

地元にあるいくつかの大学のうち、地元に期待されているにもかかわらず、学生数の少ないと加えて簡素な住宅地に立地しているためか、活気に乏しい大学がある。この大学の活性化について思うところを述べることにした。

大学がより一層活性化し県民から熱く慕われるためには「地域を育てるのは地域である」という視点が必要かと思っている。小中学校(や高校)の教育は地域と共にあるが、大学となると地域連携が薄いようにみえるので、富山の地にそうした大学をぜひ目指して頂きたいというのが願いである。

具体的には、市民との交流、開かれた大学、地域を支える大学といった方策が必要となるが、私は以下の三点を望みたい。

(1) 地域の教育を産業界と共に育んでいく。そのためには地域の産業をぜひ知的に支持して欲しいものである。ただし産学連携は地域ぐるみの活性化という意味であり、人間関係をより一層富ませるものである。産学連携の詳細には多くの方が語っているので省略する。

(2) 富山の特徴を全国・全世界に発信いただきたい。富山といえば恵まれた自然(水、森、農業、山)を如何に発展させていくか、大学の環境部門を核にして学術的サポートをお願いしたい。こうしたことはすでに勢力的に進められているが、いま少し地元との交流により研究の還元ということで地域との連携を図って欲しい。成果は県民にとってプライドとなつて現れるはずである。

(3) 市民との連携をすすめる。この種の取り組みには、大学

を中心としたまちづくりとか、生涯学習や子供学習などがあるが、ここでいう連携とは、日常性の次元でかかわりを如何に持つかということである。具体的方策を列挙すると(実現の有無は別として)；

ミニサロン構想として、いつでもどこでも(大学の)誰かがいて交流する。他大学の学生も気軽に立ち寄れるなど。キャンパスに散策コースやコミュニティ広場があればと思う。

小さな大学だからこそ、優秀な人材にめぐまれた大学だからこそ、市民連携としての活性化は可能である。

も考えられる。また、町内会とのタイアップで、ご町内への働きかけや町内会の来場での教育というか懇談会のような働きかけがあつてもいいと思う。

(3)ひとつ大事なことを指摘したい。来場者数減少イコール市民の美術意識の低下といった単路的な見方が横行している。とんでもないことである。美術館にしおちゅう足を運ばなくとも美術爱好者や美術理解者の市民は多く、彼らの心に美術の火が灯っていることもまた評価すべきことである。「おらが街におけるおらが美術」。こうしたことがしっかりと市民社会に根付いていくようにしたいものである。

9. これからの美術館について

07.04.24

美術館・博物館はどこでも入場者数の減少に頭を痛めており、活性化策や将来展望を必死に考えている。そこで私は、これからは、美術館としてではなく世の中の情報教育の拠点として積極的に打って出るべしと主張したい。

「技術偏重社会から脱却して感性豊かな社会をめざす」というスローガンで世に出て久しいが、実際には教育ひとつとっても、初等中等教育では図画工作、美術、音楽の授業時間は減る一方であり、中教審では中学校の美術や音楽は選択科目にするといった方向が検討されているとも聞く。このような状況において、果たして子供の感性が果たして育んでいくのであろうか、またそうした動きに対して市民の感性が钝感になっていくのではないかだろうか。今まさに、世の中の感性が問われているといえよう。

私は、世の中の改革を大上段に構えているのではなく、そうした時代だからこそ、全国津々浦々、人間らしさを育むように、まずは美術から動きをスタートさせてみては思っている。すなわち、感性の育成として、美術館と学校がタイアップして、あるいは家庭とのタイアップで、美術爱好者を育てるということではなく(それもありだが)、美術の理解者を増やすということを、抜本的に考えてみたい。そのためには、美術館が地域の感性の拠点となるよう、市民の憩いの場であるようにしたい。もちろん、美術の企画展をどのように展開するかといった根本的なこともまた重要ではあるが、これについては他の方にお任せして、私はいま少し広い意味でのソフトの整備について以下に数点を主張したい。

(1) 美術館に行けばいつも「美術が開かれている」。誰かがいて美術の話がいつも聞けるというようにしたいものである。また、(美術館の庭となっている)芝生広場にも美術品を並べておいて、楽しめるようにそれをもって遊べるようにしたいものである。要は、市民は生活の営みの中で学び、子供は遊びの中で学ぶ。そこに美術的な感覚が育つように作品とのふれあいを大事にしたいものである。

(2) 家族連れて訪れるができるように、お話をスペースを設ける。学校の授業参観を美術館でやっていただくということ

10. 景観について

07.05.25

最近、各自治体では、中央駅周辺の景観を改善しようとか、メインストリートに乱立する野外広告塔を規制しようとかいうことで、行政サイドが動き出している。私は、規制の議論もさることながら、もっと身近な生活環境を良くするといった基本に戻ったアプローチをすべきと主張したい。

富山はいうに及ばずいわゆる地方都市においては、街の活性化を身勝手に進めることが無秩序な街並み景観を形成し(広告看板乱立など)大きな問題となっている。この種の問題では、民活として身勝手を奨励するかのような活力を期待するところが問題をこじらせているばかりか、街を単に外見だけの見え方と見せ方で評価しようといううわすべりの対応も災いしており、街の生活観からかもし出される社会性や公共性の観点がどう定着させていくのかという根源がいつもなおざりにされている。

では、どうするのか。それは、景観が市民生活の営みの一断面であるという観点にたって、生活の営みにおける問題をひとつひとつ解決していくことしかないであろう。私は、以下のような方策が必要と考えている。

(1). 身のまわりから社会性の熟成を図る。自分の住まい環境が周りの環境を構成しているという観点をもっと持つようにしたい。例えば使わなくなった家具や製品など生活で不要になった物を無造作に自宅庭に置いている。プランターで花いっぱいにするのも必要であるが、美的感性がぶらないようにするためにも、そうしたゴミのようなものを如何に片付けるかという社会性や感性を項目(5)の教育とリンクさせて熟成したいものである。

(2). 地域の景観を守り育てる。例えば、街路樹ひとつつても落ち葉が邪魔だから枝を切ってしまうといった声があれば惜しげもなく切ってしまう。都会の小さな公園は無常に枝だけの木が立っている。我らの生活空間をいかに造り守っていくのかが問われている。生命体は人間だけではないことを、地域づくりや教育の観点からアプローチするしかないであろう。

(3). 街では生活の様相をありのままにみせる。街の隅々ま

でが子供や大人の居場所となるようにすることにより、生活の一断面の景観がますます人間らしくなる。外見の見え方・見せ方ばかりではなく、人間らしい声の聞き方・聞こえ方で街を彩りたいものである。

(4). 市民参加を実効的なものにする。市民参加について、パブリックコメントを募集したり、アイデアを募集したり、ヒアリングを開催したりしていれば、市民参加が実効したといって満足してしまう感がある。そろそろ、フィードバックの方法を抜本的に考えてもいいではなかろうか。現場において市民とのコミュニケーションをどしどし図ることこそ今日的課題である。

(5). 感性教育をすすめる。景観教育の背景にあるのは、人間の感受性の育成にある。これが今危機にある。初等中等教育では、図画工作や音楽の時間がどんどん削られ、今中学では、美術と音楽を選択科目に使用などと中教審で議論されているとも聞く。その一方では、総合学習として街づくりや景観などといつても、木に竹を接いだような話であり、根本的には解決は程遠いといえる。身のまわりから大自然や人工環境(都市環境)までをトータルに扱って、人間らしい感性を育成するために初等中等教育 機関や地域と連携して教育を進めていくべきである。

まとめとして、一言述べる。(どこの自治体にも設置されている)景観の専門的な委員会は技術的な検討を旨としているのかもしれないが、いま少しヒューマンアプローチもいるのではないかと思う。街並み外見の見え方ではなく見せ方でもない。ごく普通に生活をお互いに視覚的にコミュニケーションしておけば十分といえる。

富山らしい景観とは、富山という地における富山人の生き方や嗜みそのものであり、もっといえば育んだ文化そのものともいえる。これをもって富山発の景観形成の推進をしたいものである。

では、なぜこのようにあまりにも支持されない事業がまかりとおるのか、やはり必要・不必要をも含めた議論が一般には十分にいきわたっていないといえる。また、一方では(一部の)干拓事業やダムなどのように、作ることを前提とした工事がいいのかどうか、もっといえば今日的に工事の根源的目的が変わってきているのにもかかわらず、前近代的に工事の遂行のみが目的化していることに、市民は大きな疑問を抱いていることも事実である。こうしたことから公共事業の必要性云々がいわれるようになったのも、時代のニーズとして喜ばしいことである。

しかしながら、世の中にそうした議論があっても、それで市民感情を満足させ、市民の支持を得たということではなく、市民に対してもっと踏み込んだ何かがあってもいいように思える。具体的に言えば、行政側では市民への説明は当然のことであるが、そのまえに何よりも事業の必要性や価値について市民とともに議論して適正運用が求められ、また作る一方のやり方のみならず育て守るやり方も考えるべきである。もちろん、市民側にも今日的な社会性を市民自ら熟成していくべきである。

私は、結局のところ「公共事業は何か目新しい事業を模索するのではなく、たとえどんな小さなことでも、市民が実感できるようにすべきことこそ今一番求められている」と思っている。この観点で以下のことを実践することこそが、21世紀の事業と考えている。

(1) 市民との連携

(1.1) 事業の必要性と価値を市民側からもわかるように話し合いのスペースを設ける :

事業の必要性などについて市民の関心事として話しあう場が必要である。すなわち、行政関連部局に市民との交流スペースを設け、いろんな事業のコンセプトを常にオープンにして、また市民からのコメント記入などのやりとりできる場とする。もちろんパブリックコメント募集といったことも行う。

(1.2) 市民が事業選定にもかかわる。(極論かもしれないが) :

裁判制度と同じ論調で市民が裁判に立ち入っていいともいのではなかろうか。考えてみれば首長を選ぶのも市民なら、行政の種々の決定にも市民なりにかかわってもいいのではなかろうか。いってみれば、行政に対する市民からのクロスチェックを行うものである。ただし、専門家には専門家の役割があるので、専門家で専門に構成される場にも、市民が入り込むということではない。

(1.3) 市民の声をしっかりと反映させる :

事業を種々立案して社会状況が変わってきた場合に、再評価を直ぐに実行し、時には事業中止の選択もするようにすべきである。決まったことをどんな場合でも貫徹するという姿勢には、市民不在ということに繋がることが多い。

(1.4) 適正評価 :

公共事業では、事業そのものの価値が適正に評価されている

11. 公共事業について 07.05.29

21世紀における公共事業とは。

公共事業というと無駄使い事業というのが一般的にとらえられるがちであるなかで、行政サイドは「魅力ある公共事業とは」を考え始めている。私は、もっと市民の声を取り入れるべしと主張したく筆をとる。

公共事業というと、空気と同じように有難味が平生より認識されない有用なものはもちろんあるにもかかわらず、我らが思うにはすぐに、無駄な工事そのもの、年度末には帳尻あわせに行なわれる工事、一部の業者を儲けさせるもの、とにかく道路工事そのもの、といった捉え方が多く、なぜその工事が必要であり、かつ公共なのかといったことは、一般にはあまり認識されていないといったほうが実状である。

かが常にポイントとなる。競争入札云々のまえに、性能とか価値とかがどう設定されるのであろうか。公共事業は安くしないと納税者が納得しないという話があるが市民は本当に良いものにして欲しいのである。意思の疎通を図るべきである。

(2). 世論形成 (教育的役割)

(2.1) 物の価値についての世論形成 :

ものの価値について、ハード的な面ばかり強調されているが、ソフトに対する価値が極論すると認められていない。またハードについても安ければ何でもいいといった経済市場原理至上主義が入り込み、価値というものがしろにされてしまう。それゆえ、社会性に関する価値に関する眼力を養う地道な教育の実践が求められる。

(2.2) 公共性や社会性に関する教育 :

今日、公共性の必要性について、やはり公共環境という視点の熟成が必要であり、この種の教育をどうすすめていくのか検討を要している。単に学校教育にある総合学習で社会性に目を向けさせるということではなく、日常教育においてもそうさせるべきである。また、それは単なる啓発といったものではなく、(自然環境社会環境を含め)市民各自の周辺のものにもっと関心を持つように、教育的実践を検討していくべきものである。

(3). 公共事業に質的転換を求める。(まとめとして)

ものを作るといった発想もあればものを育て守るといった視点もあり、特に後者の視点を大事にすべきである。今後、増産に対して減産、増築に対して減築といったことも多々出てくるはずである。こうしたことで、公共事業という、いうならば街づくり都市づくり社会作りそのものを、市民自らのものとしていきたいものである。

21世紀、我が地元である富山県の公共事業が上述の観点で良い方向にすすむことを期待したいものである。

12. 市民スポーツとは

09. 07. 17

今だからこそ、みんなもっとスポーツを！！

ランニングが好きで本学学生にもスポーツを勧めておりますが、学生はすぐにダヤイとか面倒とかしゃいます。若者を対象にして教育的見地からも世の中に忘れられそうになっている本来の人間性をスポーツにより育むことができるよう、できることをしていきたいものです。筆をとりました。

スポーツの効用についていまさらいう訳ではないが、現代高度文明社会だからこそもっとスポーツをやらなければならない、といいたい。というのは、スポーツに親しむべき理由を単に健康増進の立場にだけ求めるのではなく、健全な市民生活を営むという本来の人間の育成においてもスポーツが重要な役割を持っていると考えているからである。我ら人間にとって健全な身体に健全な精神が宿るという格言があるように、「体の健康は即、豊かな生活とつながるべきものである」にもかかわらず、

豊かな生活には物質面の豊かさが強調されるあまり、精神的な豊かさがないがしろにされ気味といつても過言ではない。私は、そうしたところに、スポーツを介した人間性づくりが今だからこそ必要と考えている。

振り返ってみれば、我らは、本当に体を動かしているのであろうか、全力疾走したことがどれだけあるのであろうか。仕事でも全力疾走は(あまり)ないのではないか。ましてや納得づくの楽しみな疾走となると、どうであろうか。仕事一本でがんばっている方もおられるが、体を動かした心身ともに全力疾走であれば、楽しみも倍増し心身とも充実した生活が営めると考える。

また今日的課題としてもうひとつ。人と人との間に人間性に富んだ関係づくりにもスポーツの役割があると考えている。家庭崩壊とか地域崩壊などが危惧されている昨今、大量生産大量消費文化の中で、効率と欲望が追求されるあまり、愛とか信頼とかいった人間性がなかなか育っていないようにも思える。人間らしい行動とは、お互い苦労し、お互い達成感に浸り、次への向上を求め、お互い楽しむといったことがないのではないか。といえば、幼児教育の時点から遡って考えてみても、子供の発達過程に応じてコミュニケーションを育みながら遊びがなかなかみられなくなってしまっており、これがひいては大人社会にも影を落としている。だからこそ、我ら大人としても、もっともっとスポーツをコミュニケーションとともに楽しみ、お互いに尊重しあい、いわば人間性をみがいかなくてはならないと思える。今だからこそ、教育の現場においても、地域においても、家庭においても、そうした点からも人間性を育みたいものである。

ここで、少しエピソードを。私自身、マラソン、山登り、テニス、スキーなどを楽しんでいます。多くの方も本当はもともと楽しみたいのである(私にはそう見える)。そういうふうなことがあった。一つには、市民マラソン大会のとき、中学生が「何でうい目にあって走っているのか」といひながらも一生懸命走っていた。本能的に楽しんでいるようにみえた。二つには、沿道の方々が惜しみない声援を送っておられた。著名選手ではなくただの市民ランナーに対して。また市民ランナーもしやちこばることなく、声援に後押しされて走るさまは、本当にホットな地域社会のありようを感じることができた。やはり、スポーツの力はすごい、と実感するしたいであった。

おわりに 07. 10. 19

若かりし頃の都会暮らしを経て地域に戻り十数年も生活してみると、生活は地域とともにあることを痛切に実感し、「我らの生活をより充実したものに」と思えば思うほど「地域はこうでありますなあ」、「こうしていきたいね」などと考え、多くの方と討議を繰り返しながら2000年頃から考えたことを記録してきた。その結果が本レポートである。

こうして書いてみると、まずは結構多岐に書いたなあというのが実感である。また書けば書くほど、発信しつづけることの必要性を切実に感じるようになつた。今後ももっと書きたい

と思っている。

自分のことばかり述べたが、皆様、いかがでしたでしょうか。
私の思いが少しでも伝わったでしょうか。皆様にとって何らか
のものになったならば幸いと存じます。

末筆になりましたが、ここまでお読みいただきました皆様に
感謝申し上げます。